

原爆文学研究会報

第五一号

原爆文学研究会 二〇一七年五月

大船渡の土地言葉プロジェクト、その震災詩 東日本大震災がきっかけとなつて、二〇一四年秋から、日本現代詩歌文学館（岩手県北上市）と共同企画を組んでいる。それは、大船渡市の仮設住宅集会所や総合福祉センターを会場に、石川啄木の短歌を土地言葉に訳すプロジェクト。翻訳に協力してくれているのは、主に地元の高齢者。

例えば、啄木の代表作「はたらけど／はたらけど猶わが生活楽にならざり／ぢつと手を見る」。その土地言葉訳は「稼せえでも／稼せえでもなんぼ稼せえでも楽になんねア／じつと手つこ見つべ」。恋愛物の「かなしきは／かの白玉のごとくなる腕に残せし／キスの痕かな」は、「せづねえのア／あの白い玉みだいな腕さ残した／チュウの痕だべ」。

ほっこりした温かみやユーモアがおのずと響きに宿った翻訳が、九回にわたる催しで、一〇〇首集まった。一冊にまとめるために、いま推敲作業をしているが、心強い編集協力者は、プロジェクトにも参加してくれた地元の詩人。

震災や原発事故に絡んだ詩が幅広く話題になった時期もあったが、いわゆる現代詩の流通ルートに乗っていないため、大船渡の詩人たちは、東京その他の地域でほとんど知られていないだろう。実際、訪れるまでわたしも知らなかったのだが、津波をじかに体験し、近しい人の死や町の破壊を見つめ続けながら、丁寧ていねいに選ばれた言葉で作品を記している。

その一人、中村祥子さんの震災詩「まぶしい朝が来て」の一節は、「ひどい傷だ三人とも玄関で重なり合っていたそうよ結構集まりましたねお花をどうぞ姉さん痛かったでしょうにお時間ですなんてきれいな骨だことこんなに白くてつやつやして」。現場にいた人だけが知る生の言葉

が、ぎりぎりの感覚とともに再構成された鋭い詩。

ある日、彼女からもらった電子メールには、水道が出なかつた直後の日々を振り返つて、こんな言葉が書かれていた。あのとき喉が渴いていたみんなは、雨水を貯めて喜んで飲んだ、報道関係の車は見かけても、ラジオからは避難情報、安否情報ばかりで、原発事故も知らなかつたよ……。

惨事から六年。層の厚いその世界を掘り起こす時期が来たのだと思う。

（新井高子）

第五一回 原爆文学研究会報告

二〇一六年二月二四日（土）に神戸センタープラザで第五一回研究会を開催しました。

山崎氏の研究発表に対しては、「お清さんという存在を現在どう考えるか」、「上海ものを書いたことで、原爆ものがどのようにとらえ直されるか」、「原爆体験と上海体験をふまえた、林の即物的な文体をどう評価するか」、「租界内だけではなく外側も描かれているが、作品を読む前提として、実際の租界がどのようなものだったのか」などについて意見交換されました。

能登原氏の研究発表に対しては、「原爆詩そのものが持っている音楽性作曲家たちはどうとらえているか」、「原爆音楽に劇的な変化をもたらしたもののやポピュラリティーを獲得したものがあるか」、「五〇年代と八〇年代の反核運動で音楽にどのような違いがあるか」、「沈黙」や死者の声を



◇ 研究発表1

林京子——核と帝国と日本人娼婦

山崎 信子

原爆体験を描いた林京子作『ギヤマンビードロ』のなかには、盧溝橋事件前夜から日本に引き揚げるまでの上海を舞台に、少女である語り手

音楽的によどのように表現するのか」などについて意見交換されました。

李氏の研究発表に対しては、「そもそも雑誌「人間」と樋口健二がどのように出会ったのか」、「左翼」という語には日本と台湾では定義の違いがあるが、雑誌の傾向はどのようなものか」、「山崎豊子の作品の元の翻訳はカットされたが、反原発運動で山崎の名前がでてくるのはなぜか」などについて意見交換されました。

原爆文学「古典」再読については、「サークル誌に同時代評が多く見られる」、「リアリズムと象徴性で揺れる詩人に共感した」、「『詩集』以前の峠と作品に見られる叙情性やモダニズムをどう考えるか」、「成立については、朝鮮戦争期と入院中と文庫化の三つに分けて考える必要がある」、「全体に通じる「序」をどう理解するか」などの意見がありました。

と街の日本人娼婦「お清さん」との親交が描かれる短編「黄砂」が収められている。このことについて林は次のように述べる。「上海時代と八月九日以降の人生と生命」を「呼応」させ、自身の根底に流れる「戦争と時代」を共振させ「一つの環」を結びたかったのだと。

原爆体験を扱った作品と「上海もの」と呼ばれる一連の作品を「断絶」として捉えるのではなく、一作家におけるあい異なるジャンルだと切り離して理解するのでもなく、被爆体験という光をあてつつ一連の「上海もの」を読みなおす必要がある。林は被爆後に過去を回想するような仕方でも上海の日々を綴り、その上海を想起する眼差しはつねに被爆体験に貫かれたものであるのだから。またそこには「国」という全体性への懐疑が息づいているのではないだろうか。

このような前提のもと「林京子——核と帝国と日本人娼婦」を論じた。「お清さん」は大日本帝国下において、上海日本人コミュニティの内部における外部とも呼べるような位置を占める。中産階級の日本人妻や日本人の母親は、お清さんを「国辱」、「国賊」と呼び、「日本人のくせに」と蔑み忌諱すべき対象として扱う。「料亭」という名のもと、海軍や陸軍の客をとっていた女たちともお清さんは一線を画する。なぜなら料亭の女の身体は帝国の管理下にあるのだから。「異国人の目に日本女の肌を曝してはならぬ」という「日本人としての意識」のもと、「ゆかたに白足袋」という滑稽な格好をしてまでも、日本人としての誇りを守ろうとする日本女性とお清さんは対蹠的である。お清さんは中国人クレーリの目の前でも肌を晒し、春を売り見世物になり賭けの対象にもなる。

こうして上海の街で春を鬻ぐお清さんの身体は、「国」、「階級」、「人種」といった境界を侵犯する。少女はお清さんとの私的な交流を母から咎められる。「不良になっても知らないから」。少女の語りは日本人社会の内部で働く排除という「暴力」をつまびらかにする。日本人としての誇りを抱き「正しい」日本人女性としての振る舞いに拘泥する母たちと少女との間には亀裂が走る。

「国」という意識が形成される過程では、外国人に対するような外部に向けての排除だけではなく、共同体内部でも排除の力が作用することをエティエンヌ・バリバルは論じた。お清さんは日本人が日本人であるという意識を形成するさい、排除されるために必要とされる内部における他者なのだ。林が「同胞に対する目は厳しかった」と述べるように。こうして林は「国」という共同体が孕む暴力を静かに描きだす。多感な少女時代にすでに感じ取っていた暴力性である。被爆後ペンを執り始めてからはじめてその暴力性に言葉が与えられたのだとしても。

一九七八年に「被爆者としては国からの榮譽を受けるわけにはいかない」と文部大臣芸術選奨受賞の内示を辞退した林京子。二〇一二年夏にはフクシマの原発をめぐる国家の非倫理的な態度に抗し、代々木公園での脱原発集会にも参加した林京子。「原爆も原発もイコールですから」と述べ、国家権力のつねに介入する「核」への一貫した林の批判的なまなざしを思うとき、大日本帝国下で唾棄すべき存在として扱われたお清さんを「大好きな娼婦」として回想し、「国」意識そのものが孕む暴力を静かな筆致で描いた作品「黄砂」は、今あらたな光を帯びて立ちあがってくるのではないだろうか。

今朝、林京子さんの訃報に接しました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

◇ 研究発表2

音楽における原爆の表象

——原爆詩の扱いとその変遷に着目して——

能登原 由美

原爆投下から現在に至るまでの七〇年余りの間に、原爆や被爆地を題材とした音楽作品が多数生み出されてきた。筆者が代表を務める「ヒロ

シマと音楽」委員会の調査によれば、「原爆・核」や「ヒロシマ・ナガサキ」を題材にした音楽作品（以下、「原爆音楽」と総称）の数は、アマチュアの作品も含めると一八〇〇曲余りにのぼる。こうした原爆音楽の大半は歌詞や詩などのテキストを持つ声楽作品だが、テキストとして頻繁に取り上げられるのが、被爆者自身が被爆地を詠んだ詩（以下、「原爆詩」と総称）である。本発表では、原爆音楽における原爆詩の扱いの変遷や表現法に着目することにより、音楽作品における原爆の表象について明らかにした。

はじめに、原爆詩が取り上げられる背景について、社会的事象（ここでは原水爆禁止運動や反核運動の隆盛）と文化的事象（ここでは原爆詩の出版）の二点に着目してその影響を指摘した。

次に、テキストとしての原爆詩について、詩人と詩篇の二つの面から述べていった。まず、詩人については、取り上げられることの多い原爆詩人として峠三吉、原民喜、米田栄作、栗原貞子の四人を挙げ、音楽作品のテキストとしての特徴を明らかにした。また、詩については、もともと頻繁に取り上げられている詩篇として、峠の「にんげんをかえせ」と原の「永遠のみどり」を挙げた上で、両者の発表時期がほぼ同じであるにもかかわらず、音楽作品として取り上げられる時期に違いがみられることを指摘した。

最後に、テキストとして用いられる原爆詩の四つの表現に注目し、その音楽における表現法の違いを明らかにした。四つの表現とはすなわち、（1）被爆の様子を描写したもの、（2）被爆後の喪失感や絶望感を吐露したもの、（3）反戦・反核など第三者に向けられたメッセージ性の強いもの、（4）未来への希望をうたったもの、である。これらは単にテキストの観点からだけではなく、原爆音楽にみられる原爆の表象の型として捉えられうることを最後に指摘した。

◇ 研究発表 3

台湾現代文学における「核」の表象

——雑誌『人間』と樋口健二——

李文茹

台湾では第一原子力発電所が一九七八年から稼動する。反原発をめぐ
る言説は七〇年代半ば頃から少しずつ現れ始め、本格化したのが八〇年
代後半に入ってからだ。一九八七年三月二十七日に第三原発の前で行わ
れたデモ活動は、台湾における最初の反原発の抗議運動であり、一九八
八年四月二四日に台湾電力会社を包囲する抗議運動はそのピークを象徴
したものであると言われている。

台湾では国民党的歴史観の教育下で長い間、ヒロシマ・ナガサキの原爆
投下は日本帝国の終焉や戦争の終結を意味する歴史的出来事であり、台湾
が植民地支配から解放された歴史的シンボルであるとされてきた。いわば
生き残った被爆者の人生やキノコ雲の下で起きた出来事への想像力を育む
土壌が貧弱なまま歴史は歩んできた。また戦後、長い間、台湾社会では「核」
による被害どころか、反戦・平和反核運動などといった問題にアクセスす
る機会すらあまりなかった。このような土地では、反原発運動を行う際、
「核」の言説がいかに構築・再構築されてきたのだろうか。その問題をめ
ぐって本発表は八〇年代半ばごろに積極的に「核」を問題化した月刊雑誌
『人間』（一九八五・一一—一九八九・九）を中心に考察を行った。

戒厳令が解除される一九八七年まで、台湾では言論の自由が制限されて
いた。主要メディアがあまり報道しない社会状況や被抑圧者たちに焦点を
当てながら、社会における暗黒面を告発し続けていた『人間』は作家・陳
映真（一九三七—二〇一六）によって創刊された雑誌で、報道写真・記録文
学（ルポルタージュ）の掲載を特色としている。原発の関連記事では、四日
市の公害問題の取材で名が知られる写真家・樋口健二の作品及び文章がよ

く紹介されている。本発表は「核」を想像する土壌が用意されていなかった
台湾において、『人間』がいかに報道写真・記録文学を通して「核」をイ
メージ化したのかを問題化するのだが、分析する際、樋口が代表となる日
本人アーティストと『人間』との関わり方をも視野に入れた。今回の考察
を通して、八〇年代半ば頃の「核」をイメージ化する歴史的過程が明らか
になると同時に関連表象に潜んでいる歴史認識の問題も浮上してきた。

◇ 原爆文学「古典」再読 4——峠三吉『原爆詩集』

古典再読 峠三吉『原爆詩集』報告

野坂 昭雄

もともと抒情詩人であった峠の詩には、文語で書かれた、定型に近い
リズムカルなものもある。短歌や俳句にも習熟していた彼は、非常に伝
統的な抒情意識に支えられて詩作を行ってきたわけである。『原爆詩集』
を執筆し、サークル詩の指導的な立場へと変化したことは、概ね峠の深
化、成熟と評価されている一方で、詩的表現と政治的なメッセーヂの伝
達とがどのように交錯し、峠がいかなる表現を追求していたのかを考え
る作業は、今後も必要となってくるはずだ。

報告では、具体的に「死」という作品を見てみた。この詩は広島市立図
書館が所蔵する峠の資料（公開されているもの）で草稿が二種類あり、その
他に複製版『われらの詩』（三人社）附録の『原爆詩集』草稿も確認可能で
ある。峠の草稿研究は行う余地が充分残されているが、草稿分析の成果と
して著名な好村富士彦氏の「序」をめぐる考察と比べると、「死」はまった
く違う改稿過程を辿っている。「序」の場合、下書きメモから草稿、そして
「序」へ至る流れは、表現を抽象化し、具体的な状況を削り落とすことで
成立している。一方「死」の場合は、完成稿に至る流れは、意味のスムー
ズな伝達を停滞させ、シンタックスを意図的に乱れされる方向を持つてい
ることが分かる。この「死」は、『原爆詩集』の詩の中で、詩の表現の可能

性を追求した作品として高く評価できると考える。

この「死」を『原爆詩集』の優れた達成とみる時、サークル詩、文化運動の文脈以外に、峠の詩的経歴全体を見渡す視点も必要となってくる。報告の後半部では、『原爆詩集』以外の戦中戦後の抒情的な詩をいくつか取り上げて考えた。戦後の峠は、例えば「歌」で美的陶酔や世界との一体感を描き、また「リルケに捧ぐ」からは、加藤周一が「星董派」と呼ぶような感性を多分に持つていたことが読み取れる。「由美子と火事」もまた美的陶酔の一例である。一方、『原爆詩集』では「倉庫の記録」の「K夫人」のような（恐らく美しい）女性を、美的なるものの破壊のイメージで捉えている。峠はその欠如を埋め合わせるかのように、抒情詩において美的な完結性や連関性を追求していったのだと考えられる。

【付記】報告の際にはさまざまな意見をいただきましたが、特に『原爆詩集』収録作品の執筆順についてご教示いただいた黒川伊織さん、そして社会性と芸術性を共に追求する運動としての超現実主義に関して示唆的な意見を下さった新井高子さんに、この場を借りてお礼を申し上げます。

彙報

第五一回 原爆文学研究会

○日時 二〇一六年二月二十四日（土）

○会場 神戸センタープラザ17号会議室

○研究発表

発表1 林京子―核と帝国と日本人娼婦

山崎 信子

発表2 音楽における原爆の表象

能登原由美

発表3 台湾現代文学における「核」の表象

李 文茹

―雑誌『人間』と樋口健二―

○原爆文学「古典」再読4 ―峠三吉『原爆詩集』

発題者 川口 隆行／野坂 昭雄

機関誌 「原爆研究文学」 第一六号原稿募集

本研究会が年に一回発行している機関誌「原爆文学研究」の一六号の原稿を左記の要領で募集します。この機関誌には「原爆文学」の評論の他、エッセイも掲載します。奮ってご投稿ください（今回から投稿宛先が変わりますので、ご注意ください）。

○書 式 縦書き、二九字×二四行、二段組。

○投稿締切 手書きやプリントアウト原稿での投稿の場合は二〇一七年

九月中旬、データファイル（Wordか太郎）を添付し

ての投稿の場合は同年九月三〇日。

○発行経費 投稿者は、各自の原稿一頁（機関誌の書式）につき、一〇

〇〇円を発行経費として負担する。

○投稿宛先 千六五一―二一八七 神戸市西区学園東町九―一

神戸市外国語大学 山本昭宏研究室

編集後記

昨年度からはじまった第二期世話人会では、会報編集を一年ごとに交替することになりました。私は第一期世話人会の二〇一二年九月（三九号）から本号まで、約四年半の担当でした。この間、連続WS等の企画が続ぎ、多くの方々に発表要旨と印象記と巻頭エッセイをお願いしましたが、みなさん快く引き受けて下さいました。ありがとうございます。一七年度は村上陽子さんです。よろしくお願いいたします。（楠田剛士）

発行元 原爆文学研究会事務局

〒八一四―〇一八〇 福岡市城南区七隈八一―一九一

福岡大学人文学部 中野和典研究室内

tel:092-871-6631（代表）/e-mail:nakanok@fukuoka-u.ac.jp

URL <http://www.genbunken.net/>